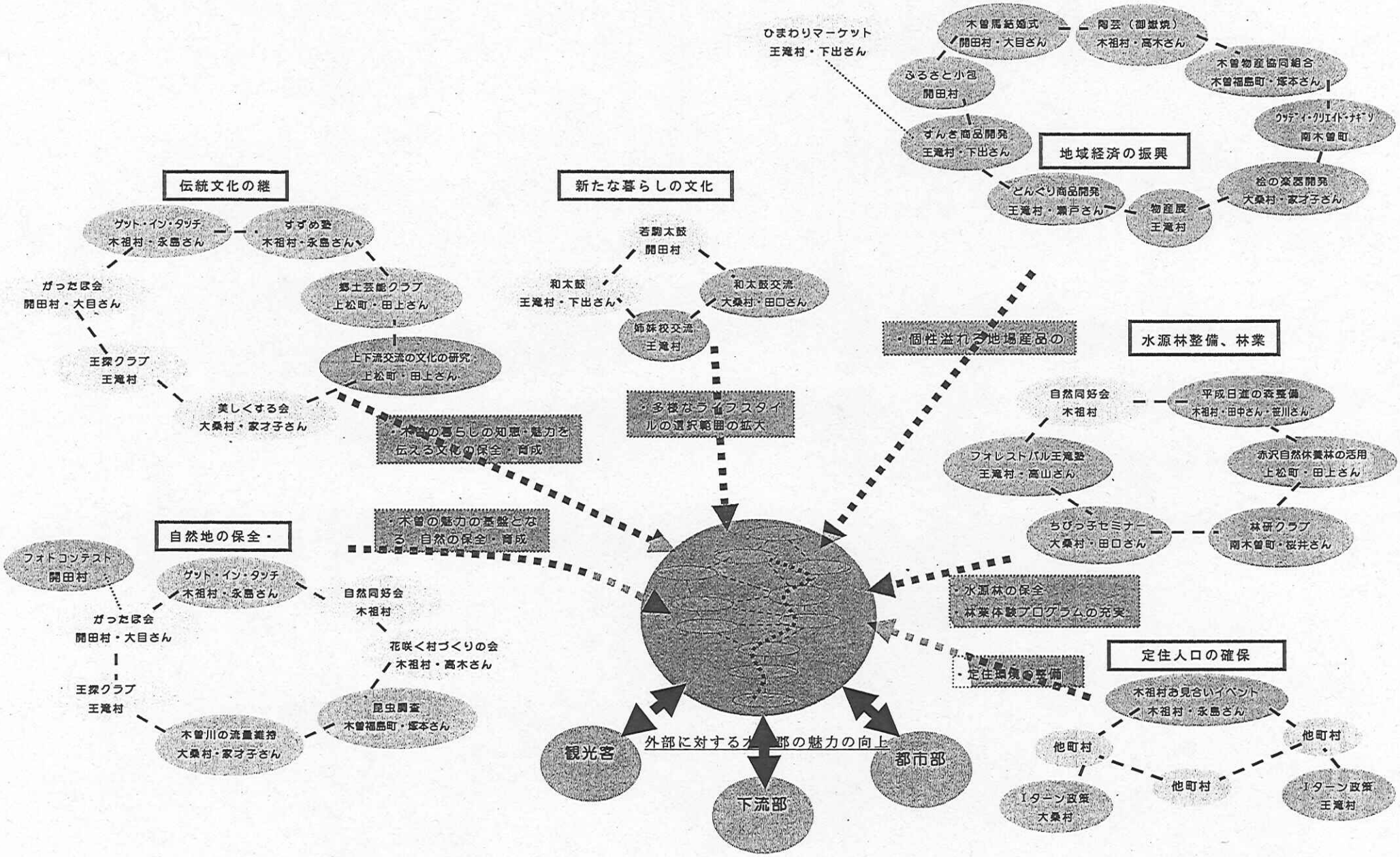

地域経済の振興
ひまわりマーケット
王滝村・下出さん
木曽馬結婚式
開田村・大目さん
陶芸（御嶽焼）
木祖村・高木さん
ふるさと小包
開田村
木曽物産協同組合
木曽福島町・塚本さん
ｸｯﾃﾞｨ・ｸﾘｴｲﾄﾞ・ﾅｷﾞｿﾘ
南木曽町
すんき商品開発
王滝村・下出さん
どんぐり商品開発
王滝村・瀬戸さん
物産展
王滝村
桧の楽器開発
大桑村・家才子さん
伝統文化の継
ゲット・イン・タッチ
木祖村・永島さん
すずめ塾
木祖村・永島さん
がったぼ会
開田村・大目さん
郷土芸能クラブ
上松町・田上さん
王探クラブ
王滝村
上下流交流の文化の研究
上松町・田上さん
美しくする会
大桑村・家才子さん
・木曽の暮らしの知恵・魅力を伝える文化の保全・育成
新たな暮らしの文化
若駒太鼓
開田村
和太鼓
王滝村・下出さん
和太鼓交流
大桑村・田口さん
姉妹校交流
王滝村
・多様なライフスタイルの選択範囲の拡大
・個性溢れる地場産品の
水源林整備、林業
自然同好会
木祖村
平成日進の森整備
木祖村・田中さん・笹川さん
フォレストパル王滝塾
王滝村・高山さん
赤沢自然休養林の活用
上松町・田上さん
ちびっ子セミナー
大桑村・田口さん
林研クラブ
南木曽町・桜井さん
・水源林の保全
・林業体験プログラムの充実
自然地の保全・
・木曽の魅力の基盤となる自然の保全・育成
フォトコンテスト
開田村
ゲット・イン・タッチ
木祖村・永島さん
自然同好会
木祖村
がったぼ会
開田村・大目さん
花咲く村づくりの会
木祖村・高木さん
王探クラブ
王滝村
昆虫調査
木曽福島町・塚本さん
木曽川の流量維持
大桑村・家才子さん
定住人口の確保
・定住環境の整備
木祖村お見合いイベント
木祖村・永島さん
他町村
他町村
他町村
Iターン政策
大桑村
Iターン政策
王滝村
観光客
外部に対する木曽部の魅力の向上
都市部
下流部

＜懇談会メモ＞

1）活動紹介

第２回懇談会において参加者より発表された各地域活動の着眼点は以下の通りです。

家才子さん（大桑村）…美しくする会

- キャッチフレーズ「大島を花咲く公園にしよう」…ミツバツツジや桜、サンショウ、シャクナゲ等を植える。
- ルール…地区内では、だまって他人の土地に植えてもいい。そこの地主が必要と認めれば、そのまま存続。ダメであれば、切って捨てるか、他の場所に植え変える等する。
- 年２回程の活動で、整備をしながら環境づくりをしている。全区民が会員。「花壇や水舟を作り、美しい所でより快適な生活をしよう。」
- 自分達ができる力で無理をしない。できるだけ他人の力を借りよう。小さな力で長く継続。
- 地域の連帯感を高める。
- 美しくする会の幹部が２年前から田んぼづくりを始めた。
  - 良い農家よりも、一反あたり２～３俵余分にとれる。木曽農協の人達が見に来るほどの出来映え。
  - 小学校５年生の稲作の勉強をかねて、「田植え」「田おこし」「稲刈り」等を一緒にやっている。
- 「田の神様」…一月遅れの端午の節句（６月５日）に祭りがあるので、小学校５年生を招待し、地域の子供達を伝統行事に参加させる。
- 問題点として、「好きでやってるんだから」と言われることにはじめは抵抗があった。
- 資金的には、全戸からお金をいただいたりして運営しているが、足りない時は役員がアルバイトもする。上流から流れてきた流木を製材屋へ売ってしまう。

渡辺さん（木祖村）

- 木祖村と日進市の交流（友好提携）
  - 村の中心的な施策…「人口が減少する中で、交流人口を増やすことによって実質的な人口を増やし、地域の産業等を活性化することに結びつける」
  - 人口 3,800 人の木祖村と、人口 50,000 人以上（人口急増都市）の日進市との交流で、日進がどれだけ木祖村のことを理解してくれているか疑問。
  - 村の内部にも、「一部だけで交流やってるんじゃないか？」という声もある。
- 龍の会（最近出来た）…Ｉターン等色々な人が参加して、農業体験等や地域資源を結びつけたプログラムが何かできないか検討している。最近テストウォークを行った。
- 交流センター…年間を通した施設の運用を検討中（グリーンツーリズムも含めて）。

澤頭さん（木祖村）…木祖村自然同好会

- 地元の自然を知る、親しむ。
- 会員60名。木曽群内、県外にも会員がいる。
- 年４回の活動…春「新緑の～林道を歩こう」、夏「～を遡ろう」等、自然に親しむ。
- あやめ池（人工のため池）…植物、昆虫、鳥類等の自然が豊か所。村に働きかけて観察歩道が完成。今後その周辺をどうしていくか、環境整備と併せて課題になっている。
- ただ歩くのではなく、会員の中にいる研究家の話をききながら勉強（鳥の種類、花の名前、観察の仕方等）
- 正月には講演会。今年…「木祖村の特色ある植物」、来年…「木祖村の水はどれほど美しいか」
- Ｉターン者や若者にも会に参加してもらいたい。

大家さん（王滝村）

- 長野県西部地震以来川が荒れている。
  - ⇒ 国民の森事業…どんぐりのＰＲとして、どんぐりの実を下流の人に育ててもらい、育てた苗木を被災した山へ植える取り組み。
- 下流の町村（東郷町）との交流を通して物産展等で王滝村をＰＲしても、なかなかわかってもらえない。
  - ⇒ 「木曽の御岳から来た」と言わないとわかってもらえないことが多い。
  - ⇒ 一町村で売るよりも「木曽」というブランドでうまく利用して、下流域の人達にアピールできるものを作り上げていけたらいい。
- 御嶽山を中心とた岐阜県側との交流
  - ⇒ 「御岳イレブン」（行政の会議）…御嶽山を中心とした活性化を図っていく。
  - ⇒ 広域的な視野にたって考え、一町村でできないことは、みんなで協力し合って良くなるように努力する。
- 一村一品ではなく、３町村で持ちよってＰＲできたら、より良い物が提供できる。

大家さん（王滝村・公民館長）

- 王滝探索クラブ（小中学生対象）…将来子供が自信をもって王滝村の話をできるように、自然と触れ合いながらの体験学習（遠足、川遊び、キャンプ、御岳登山等）を企画している。
- 教育交流センター…都会の子供と王滝の子供が交流する中でたくましく育って欲しい。
- リーダー研修（小５、６対象）…交流の場にいい。
- 緑の少年団…郡内の子供が一緒になって活動できる。
- 上下流の交流として、下流域と公民館の交流をしながら、その中に子供も加わって行き来できるように発展していければと思う。

下出さん（王滝村）

- 年１回の「木曽群太鼓フェスティバル」でのグループ同士の親しい関係あり。お互い刺激し合っている。
- 「ひまわりマーケット」…12～3 名の主婦のグループで青空市場（今年２年目）を開催している。「王滝で寄り道できる所ができて良かった。」とマーケットに何回も足を運んでくれる人もいる。
- “すんき”や“どんぐり”のセットを「ゆうパック」で販売…“すんき”や“どんぐり”を使った商品をよその人達に知ってもらいたい。今のところ、木曽郡内での注文が多いが、今後どれぐらいの注文がくるかはもう少し続けてみないとわからない。
- 最近、行政の方でのイベントがないので、何か自分たちでやってみたい。

瀬戸さん（王滝村）

- どんぐりを使った特産品づくり。
  - こだわりを持ってやっていけば全てのものに通じる。
  - どんぐり（ミズナラ）の苗を植える ⇒ 保水力があるので、水が豊富になる ⇒ 木に対する憧れもある。
  - ３年前から文化会館のお客にどんぐりコーヒー等出している。
  - どんぐり染め…どんぐりの皮を使う。商品化できればどこにでも置いておける商品。
  - 「そこでしか食べられない」というのも大事にしたいが、その一方で“特産品”として大々的に「どこでも食べられる」ようにした方がいいのか？
- 観光地というからには食べ物も考えてたい。
  - 木曽の自然でとれる物のレシピ ⇒ その土地でとれた物でもてなしができるように。
- 「三岳村の梅ワイン」、「王滝村の猪豚」等の商品開発…みんなで協力して研究していけたらいい。

２）今後のソフト展開（案）

地域活動を改善していく今後の方針として以下の意見が抽出されました。

大目さん（開田村）

- Ｉターン者の独創的な発想を活かしたい。地場の歴史、伝統的な文化、自然等、地元の人間が気づかない足元の良さに関心を持ってくれる。
- 内容や事業によって、連携できる部分は近隣町村で一緒に取り組んでいきたい。塩尻市での「ヌーボーワインと新そばフェスティバル」のようなイベントをやってみたい。

⇒ 開田のそば、三岳のワイン、王滝の猪豚で、協力して楽しいイベントできないか？地域の特産品のＰＲ。

田中さん（木祖村）

- イベント…「夏のサマ。ーキャンプ」「冬のスキー」⇒ 日進市にない環境が木祖村にはある。
- ソフト面が充実しない。

⇒ 我々もソフト面でサポートできる部分は努力が必要。ただ客が来て泊まってもらうだけではダメ。

⇒ 滞在型（２～３泊）の受入にするには何かアプローチが必要。「体験農業」や「探索コース」等のＰＲ型のもの。

- イベント実行委員会（村で立ち上げ）…「全国イワナ釣り大会」「絵画大会」「交流マラソン大会」「俳句大会」の４本柱が10年続いている。
- 交流の中で勉強させてもらう部分もある。我々の施設や受入体制等で日進市民に示唆してもらう。お客の立場で木祖村の足りないところを教わっている。
- 日進市の方がよく木祖村に来るが、木祖村だけで帰ることはまずない。飲み食いしたり、買い物したり、お湯につかったりということになると、他のまちにも行く。開田村や王滝村にも何度も足を運んだ。しかし、そういった時に他の村の情報がない。例えば、どんぐりコーヒーを飲みたいを思っても、情報がないのでどこに行ったらいいのかわからない。
- 「私の所へ来てもらえれば観光案内できますよ。」とか「名物はこんな物がありますよ。」とか「食事はこういう所でどうですか。」というようなことも一つのソフトではないか。旅人にやさしい、旅人が木曽を満喫して帰れるような“水先案内”みたいなものが木曽には足りない。
- ガイドブックやマップで読み取れない口コミの情報やその知識などを、もう少し共有しておくと、紹介する方ももっと違う紹介のしかたができる。

大家さん（公民館長）：

- 下流域との交流の前に、木曽郡の情報交換を徹底してやるべきだ。また下流域との交流の中で、林業・農業・木工細工等を体験学習で活かすといい。
- 王滝村の中学校と御前崎町の中学校は交流があり、10年程前から民間交流に繋がっていて、ソバ蒔き・収穫・ソバ打ち等の体験を御嶽参りと兼ねてやろうという話をしたら、是非計画してほしいと言われた。

澤頭さん

- 村に住んでいる人でも村の中を知らない。村を紹介できるような子に育てるという話もあったが、私自身も時間が持てるようになって改めて「こんないい所があったんだ」というような新しい発見があった。ましてや外から来た人は口だけで話をしてもわからないのだから、私達自身ももっと足元を知ることも大事だと思う。

- 木曽の観光連盟等でお金をかけてパンフレットを作っているが、外の人にはわかりづらくあまり役に立っていない。難しいことを書かなくてもいいから、具体的にひと目で見られるということも大事にした方がいい。

下出さん（王滝村）

- 自分からすると「上下流交流ってなんだろう？」とか、それすら理解できない。“上下流交流”というものをもっとわかりやすくしないといかない。下流の人には伝わらない。

渡辺さん（木祖村）

- グリーンツーリズム
  - 都心部の人達に村に滞在してもらい、文化や自然を体験してもらう。⇒ 都会の人も求めているし、これから必要なこと。
- 広域全体で一つのことをやるのはいい事だが、まずはまとまれる所同士で結びついたり、いろいろなところで手を繋ぎあっていくような方向でやっていくのもいい。

家才子さん（大桑村）

- 活性化にはいろいろあるが、お金を落としてもらわなきゃダメ。11町村で同じテーマで乗れるベースはある。例えば、木曽広域の景観についての取り組み方で、「モミジを植えて木曽街道を作ったら」とか、そういう“木曽ブランド”をより高めるようなことをしながらお金を落としてもらわないと。
- いくら嶽麓三村といっても、統一した意識がないとうまくいかない。木曽は一つと言っているが、今木曽は三つぐらいある。なかなか一つにはなれない。だからこそ、統一してできるテーマを作っておいて、その中で色々なことをやっていかないとうまくいかない。いつも同じ仲間で活性化を図って下流域とどうこうと言っているが、そこの核が抜けている。

高木さん（木祖村）

- 各町村でもそれぞれの団体で花づくりを通して街をきれいにしようという活動があると思うので、そういう面からの連携は可能だと思う。
- 御嶽焼きは、御嶽山を中心にした連携。御岳の土を利用して焼物をつくる人達で村おこしを進める。まだ活動を始めたばかりだが、三岳村のイベントで作品を売ったりしているので、今後、連携してやっていければと思う。
- 資源開発という面で、“どんぐり”や“どんぐりの釉薬”などの話がありましたが、私も釉薬はトチノキの灰やソバガラの灰等いろいろと試みている。木曽では食べるソバだけでなく、ソバを入れる器もソバを利用して作ったものというような特色を出してもいいと思う。そういったものを広域の中で活かすことによって、木曽の良さ（地元の良さ）というものが生まれてくるのではないか。

田上さん（上松町）

- “水や緑”を外観的に捉えるのではなく、水のそのものの資質（本物らしさ）を捉えていいのではないか。
- 「森林浴」や「水のきれいさ」を謳ったものをもっと専門に示唆できるようなものができてくると良い。
- 「木曽は一つ」という考え方よりも、一つの文化的なフイールドとかソバだとかイベントだとか、いろんなパターンをもう少し探ってもおもしろい。
- 活性化のキーワードの一つとして「自然と健康と安心」というのが木曽の持ち味。これはみんな共通していて、さらに詳細部分に迫ってみると、例えば木曽にはセンニンソウという毒草で扁桃腺によく効く葉があるといった情報がある。こういうことをきっちりと情報提供していけば、それを求めて木曽へ来てくれるのではないか。
- ソバも美味しいだけでなく、薬膳料理的なものとして取り上げて、糖尿病に効くとかそういう繋がりみたいなものがあると木曽の一つの方向性としても良いのではないか。
- 文化財関係だったら、～先生のところへ行けば何とかなるとか、薬草関係だったら、王滝の～さんのところへ行けだとか、そういうものをきちっと木曽の中で捉えていけば、それぞれフィールドの楽しさ・面白さ等、いろんなものに繋がっていくんじゃないか。
- 去年から“木の文化”をもうちょっとやろうという話があって、12 月 19 日に文化公園の 10 周年記念として「こだまの響き」というタイトルで桧等の木を使った楽器の演奏をする。王滝村、大桑村、上松町で三味線、横笛、ヴァイオリン等を演奏する。そういったことを上流の人がきっちりと捉えていけば、下流の人達も“木の本物の文化”や“木から派生した文化”に触れたくなるのではないか。

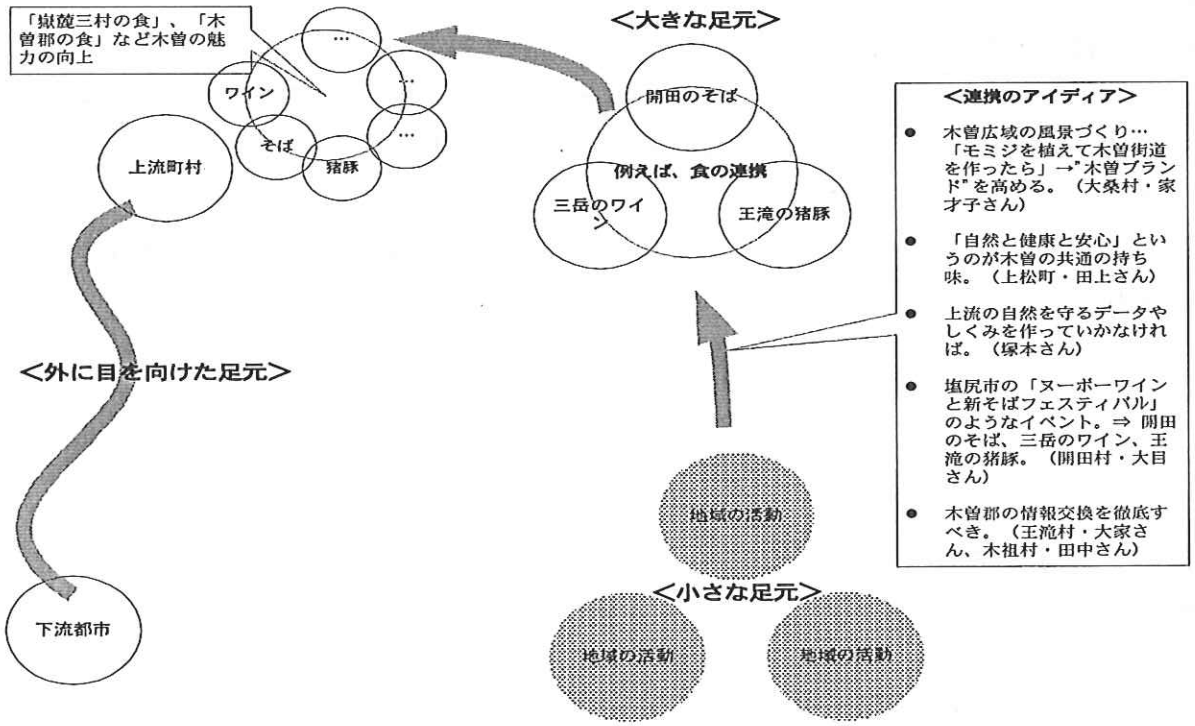
5－3．第3回懇談会

議論のポイント3…地域～広域～上下流がつながっていることを議論する

第2回懇談会では「小さな足元（各町村）、大きな足元（木曽郡）」まで議論が進められた。第3回懇談会では、これに上下流の視点を加え議論を進めるため、

（小さな足元）　（大きな足元）　（外に目を向けた交流）
「地域の活動、広域的な活動、　外との交流　はつながるのではないか」というテーマを設定した。外との交流を視野に入れることによって、連携して取り組むテーマは大きく「山づくり、風景づくりをどう進めるか」、「地域素材をどう活かすか・相手の声をどう受け止めるか」に集約された。

「山づくり、風景づくりをどう進めるか」とは、下流住民に木の文化を伝えるにあたり木曽郡としていかに美しい水源地域の姿を守り、育くんでいくかというテーマである。「地域素材をどう活かすか・相手の声をどう受け止めるか」は地場材の活用により地域の魅力をアピールするとともに、自分達の取り組みに対する他からの評価をどうように把握するかである。



＜懇談会メモ＞

活動紹介

南木曽町・桜井さん…林研クラブ

- 地域の子供達に地場産業を知ってもらうため、小中学生を対象とした「シイタケ採り」「シイタケ植菌」「学校分収林での森林整備活動の手伝い」をおこなっている。
- 平成４年頃から名古屋市周辺の住民の方と交流し、水源の里体験実習を 10 回開催してきた。初めは参加者の集め方等、いろいろと問題があったが、現在では毎回 30～50 名程が中京方面から参加している。

木祖村・唐沢さん…上下流交流事業

- 味噌川ダムの建設中から、完成後は広く下流域の方（日進市、名古屋市、一ノ宮市）と交流してきた。
- 平成９年に「木曽地域振興構想」が見直しで、木曽全体で下流域とつき合わなければ木曽の生きる道はないと提案し、プロジェトの中に組み入れた。
- 昨年８月文化公園で上流域と下流域（80 余町村）が交流事業の第一歩としてイベントを開催した。
- これからの国土づくりは流域圏毎に上流と下流が手を結んで行くことが大切。
- 木曽全体がネットワークを組んで、みんなが協力できるような形態をつくりたい。
- 下流は、木曽から水が行ったおかげで人口が増え工場が発展したが、上流 10 町村は貧乏なまま。これからは、下流の人達に見返りを返してもらう。山の木を昔のように戻すために、下流で恩恵をこうむっている人達にも協力してもらう。⇒“水”と“緑”を資源に、下流から客を呼ぶ。
- 10 年交流してきて、今、壁にぶつかっている。それを脱皮するために、みなさんの知恵を拝借したい。

山づくり、風景づくりをどう進めるか

大桑村・家才子さん

- 「木曽は一つ」と言っても、核となるものがなければなかなか一つになれない。花を作ることを共通テーマとして（一番やりやすい、簡単）はどうか。例えば 11 町村でそれぞれのまちの木や花を活用してはどうか。
- 19 導線沿いを見ても村木のヒノキ並木も村花のシャクナゲも見られない。これでも本当に村木（花）か？
- 以前、高校生がもみじを植える提案をされたが、なかなか実行するには至らない。

- 統一したものを作っていけば、魅力を感じて人が来るのではないか？
- “見る”観点を変えていく。“美や花”を共通テーマとして地域性を高めて考えてもいいのでは？それは各町村の道路沿いや駅に植えたり、19号線沿いに限らなくともよい。

木祖村・高木さん

- 以前は各町村に花を作るための補助金（150万円位）があり、苗を配布し花づくりをしようという動きがあったが、3年前からは打ち切られてしまっている。19号線の美化についてはたち切れとなっている。
- 県道を整備する時に花壇も一緒に作ったり、ドライブインに共通の花を植えたらどうか。

木曽広域連合・長瀬さん

- 観光連盟では沿道景観について「沿道クリーン作戦」を展開している。藪からきれいな林に。
- 初めて木曽全体で取り組んだ事業だし、手を入れればきれいな状態が続くのでこれからも活動を続けていきたい。

南木曽町・桜井さん

- 「林験クラブ」を通じて下流住民と交流している。リピーターの話では、山に囲まれた田舎に来て地元の人達と話をしながら農業を体験し、うまい空気を吸うとホッとするらしい。
- 将来的に「木曽は一つ」という考えは必要。木曽を縦断するだけで、83㎞もある。南木曽で83㎞といえば、名古屋に着いてしまう。中京圏の人が来やすいのは家を出てから2～2.5時間の範囲だと聞いている。

木祖村・高木さん

- 「自然との関わり」と「花づくり」との関係をうまく結びつけるものとして、木曽で希少価値の高い山野草のミソガワ草がある。江戸時代から地元の名前がついた幻の花として伝わってきた。
- ミソガワ草を大事に育てて山へ返す。「花づくり」と「山野草」との接点ができる。木祖村役場の前にも植えてあるが、みんなに苗を配布してあちこちに植えたりしている。

王滝村・下出さん

- 地元の人間は気づかないが、他所の人からは、「白樺を見ると山へ来たと」という意見を多く聞く。地元の人間と観光客の感覚は違う。白樺・もみじは人気がある。

上松町・田上さん

- 国道に花を植えるのは大賛成。各町村で沿道から一歩中へ入った時に、独自の花の風景があって良い。他所の人のためではなく、自分の住む地域を良くするという意識づけでやる。
- 山が荒れているので、地元住民の力で「山づくり・国土づくり・土づくり」を提言する。

王滝村・大家（幸雄）さん

- 花づくりは、沿線に花がずっと繋がっていかなくても、各町村・地域毎にいろんな花づくりを計画して作ればいい。そしてその情報交換（〇〇地区でこういうものをやっている）していくことが大事。それが、少しずつ点～線～面に変わっていく事業になっていくと思う。
- 山づくりに関しては、春の植樹祭に下流域の市町村にも参画してもらい、「山づくり＝水づくり」ということを認識してもらいたい。

木祖村・唐沢さん

- 日進市が味噌川ダムの上流に「平成日進の森」を作った。「自分の水は自分で守る」という考え。
- 植樹祭、育林で市民と村民が交わって一緒に木を植えたり、語り合ったり、酒を飲んだりすることは非常に良い。
- 木曽の各町村も下流域と姉妹提携を結び、国有林や村有林に山を設けて、一緒にやっていけば、木曽郡中の荒れた山もみんな木が植わっていくのではないか。
- 上流に来た時についでに買い物をしたり泊まっていけば銭がおちる。非常に良い経済交流ができるのではないか。
- 荒れた農地に山菜を植えて、下流の人に山菜採りをしてもらうことも考えている。

地域素材をどう活かすか・相手の声をどう受け止めるか

大桑村・家才子さん

- 木曽桧三味線を振興させて地域の活性化に繋げる。
- 「木曽桧三味線世界大会」も考えている。「木曽の桧を知る」→「木材・木工の振興」→「山づくりに気を配る」
- 文化的なものを教える指導者が足りない。⇒下流域から協力してもらう。
- 初めの立ち上がりは行政でも一つのグループが出来あがれば、そこから輪が広がっていきやすい。
- 桧に関わらず、自然の素材を活かしたもので文化と結びつける。

上松町・田上さん

- 上松町には桧太鼓がある。

王滝村・大家（親）さん

- 各町村で和太鼓のサークルをつくっている。木曽太鼓連盟があって年１回文化公園で発表会を開催している。5～6 団体が参加している。今年は桧の横笛も取り入れた。

開田村・大目さん

- 開田村を PR するため関係者やマスコミを集めて懇談会を開く。以前は一流のホテル等で行っていたが、それでは本当の良さがでないから手作りでやることになった。白樺やオミナエシで飾り付けをし、木曽の特産品（南木曽の地ビール、楢川村のさるなしワイン、王滝のどんぐりパイ等）を提供した。非常に好評、感激された。
- 木曽には個性的な食文化がある。そういったものを下流域の人達に味わってもらいたい。
- 21 世紀を前にして、これからは「自然・健康・安心・安全」がキーワードになっていくる。
- 「植樹祭」や「体験学習」も、木曽 11 町村で協力・連携して出来ると思う。又、作業だけでなくその後は地元の特産品の提供したり、先程の桧三味線や太鼓の披露をしたりして下流の人と交流できたらいい。
- 郡内で連携を深めながら PR をしていくという観点で、各町村の広報誌に統一記事のコーナーを設けている。各町村の代表的なイベントや新しくできた観光施設の紹介等を載せて、お互いの町村を知ってもらう。
- 開田村では広報誌は、村内配布、郡内関係機関への配布のほかに、別荘・分譲地所有者（960 部、中京関西方面）へ管理センターを通して配布。⇒木曽の PR ができるのではないか。
- マスコミの方に資料を配ったり、ビデオで紹介したりして PR して記事に書いてもらう。

木祖村・永島さん

- PR については大目さんの話は大変参考になった。単独の町村がやってもあまり意味がない。他所から見れば王滝村も日義村も木祖村もみんな同じ木曽である。各町村が木曽を代表して PR した方がいい。
- 地元の人が開いたホームページにアクセスしたい人もいるので、木曽広域のホームページからリンクできるようにインターネットの整備は必要。⇒お金をかけないで PR できる。
- 新しいもの作ったり模索していくのではなく、たくさんあるものをみんなに知ってもらいそれを見せるようにする方がいい。⇒接待となると飛び切りいいものを見せようという気が働いてしまうが、他所から来る人はそれを求めているわけではなく、地元の人が気づかないなんでもない事が都会の人には飛び切りいい事になる。

- 都会から来た高校生の感想文では、いろいろな体験の中で「こだまの森で見た星」が印象深かったと書いている。⇒その辺から木曽のPR良さ知らせていく。

王滝村・大家（親）さん

- どんぐりを外へ向けて発信している。営林局や中日新聞、地元新聞の協力を得て記事に出してもらっている。
- どんぐりを通した取り組み⇒下流域の人にどんぐりの実（ミズナラ）を拾ってもらい、自宅に持ち帰り育ててもらう⇒育った苗を再び山に戻して植樹してもらう。⇒みんなの手で豊かな自然ができ、それがまたみんなの所に還元されるということを理解してもらいたい。単発で終わるのではなく何年もかけて、山が再び元に戻るように。

王滝村・下出さん

- 商売柄、民宿に泊まるお客さんから、観光客のニーズを聞いている。

木祖村・渡辺さん

- 日進市民と交流してきた笹川さんによると、都会のひとに合わせて食材にいろいろと加工して出すよりも、新鮮なものを手を加えずに出した方が良いらしい。
- 龍の会は、木曽村のプロ集団で、滞在型の体験プログラム（白菜の収穫、牛の乳絞り等）づくりをしている。
- 行政で出しているホームページへのアクセスも多いと聞いているが、情報量が少なく更新されていないことが多い。情報をリアルタイムで更新できるようにしたい。
- 個人でホームページを出したがっている人や作っている人も多い。

木祖村・唐沢さん

- 下流の人が飛びつきたくなるような企画をたてないとダメ。1町村で考えるよりも全体で考えた方がおもしろい。
- ある会社では、通常の慰安旅行でなく、社員に農林業体験をさせることによって社員のやる気を出そうとしている。これからは企画を建てて受入体制を整えていかないと。

木曽広域連合・長瀬さん

- 昨年8月にあった「水と緑のフェスティバル」はいろんな面できっかけとなった。今後は下流域からの声を我々がどう受け止め変えていくか。
- 農林省から、木曽をモデル地区として「平成日進の森」のような森づくりをやりたいという声があった。1町村30haずつ提供してくれる所はないかと探っているようです。上流域に「水源の森」を作っていきたいという下流域の声に答えていけるのではないか。
- どこに情報を出してどういうふうに情報をキャッチしていくかという意味では課題が残っている。
- 民宿でがんばっているところは独自の取り組みをやっている。しかし観光協会に売り込めばいいのに、やっていることを周りに知らせてないのでもったいない。

５－４．第４、５，６回懇談会

議論のポイント４…地域連携、広域連携、上下流交流に向けた具体的な展開方針を議論する

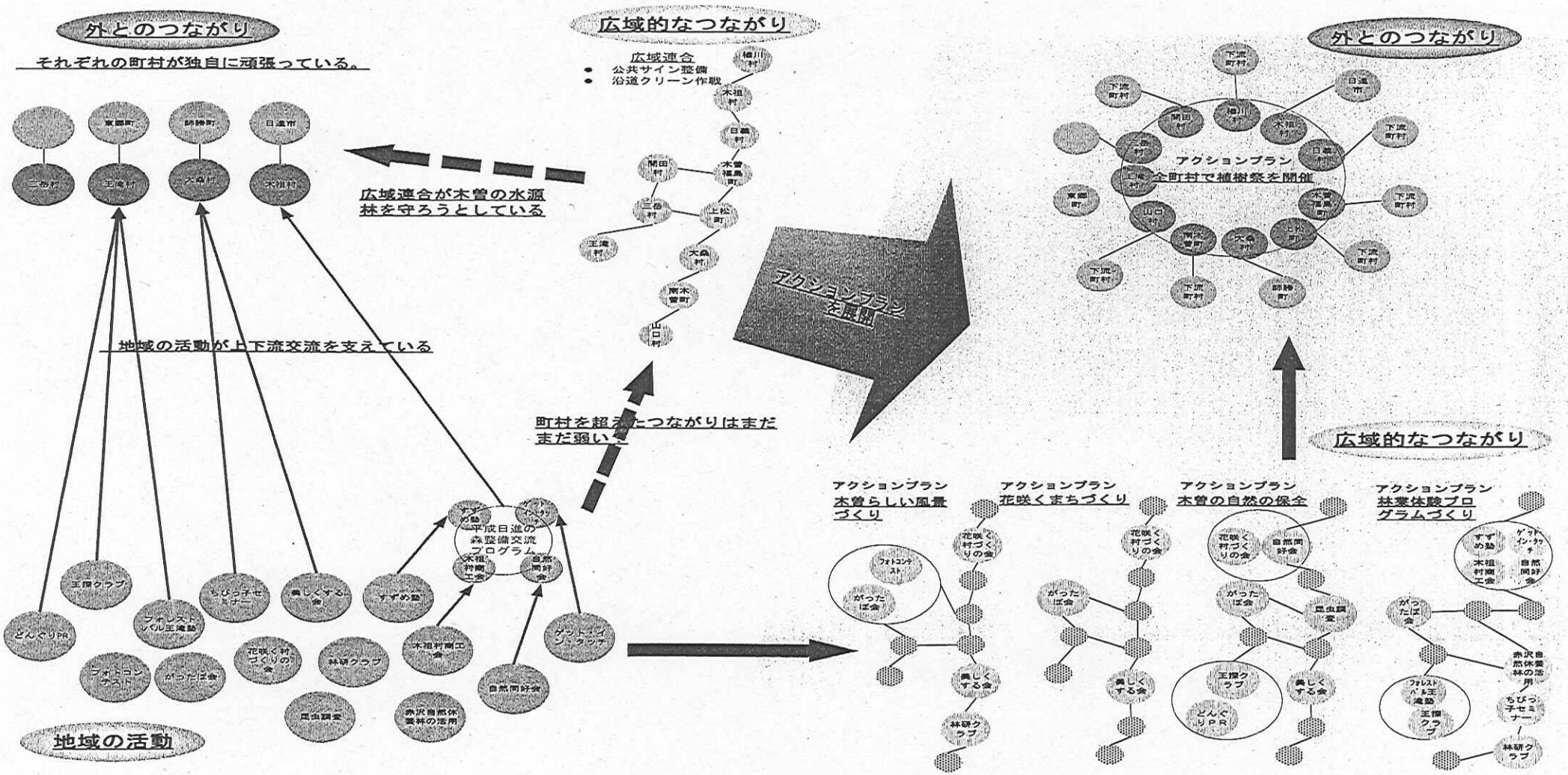
本調査は、地域住民主体の上下流交流主体の形成を目的としている。このため、地域住民から出されたアイディアを議論の段階で行政に預けるのではなく、地域住民自身が上下流交流の試行→見直し→改善のプロセスに関わっていくことが肝要である。地域住民、行政ともに試行を通じて地域の実情にあった連携のあり方を模索する必要がある。このため、第４～６回懇談会では、これまでの議論で抽出されたアイディアを具体行動に繋げていく方策を議論した。

議論の進め方としては、これまでの検討結果を踏まえたアクションプランについて全体で認識の共有した後、上下流交流に先進的に取り組んできた自治体である木祖村において、アクションプランの具体化を検討する予定であった。しかし木祖村での議論の段階では、アクションプランの具体化ではなく、地域住民、地域活動、行政が連携して取り組む仕組み作りが議論の中心となった。地域住民の立場からは、まず本調査の懇談会のように各主体が同じ席に着き、交流や活性化について議論し実行していく体制、上下流交流を支える窓口を構築することが必要ということであった。

第４回会議では、「美しい木曽をつくるアクションプラン」、「地域資源を活かし交流を深めるアクションプラン」の事務局案に対し、両プラン共に具体的な連携のしくみ、参加のあり方について再度検討することが確認された。

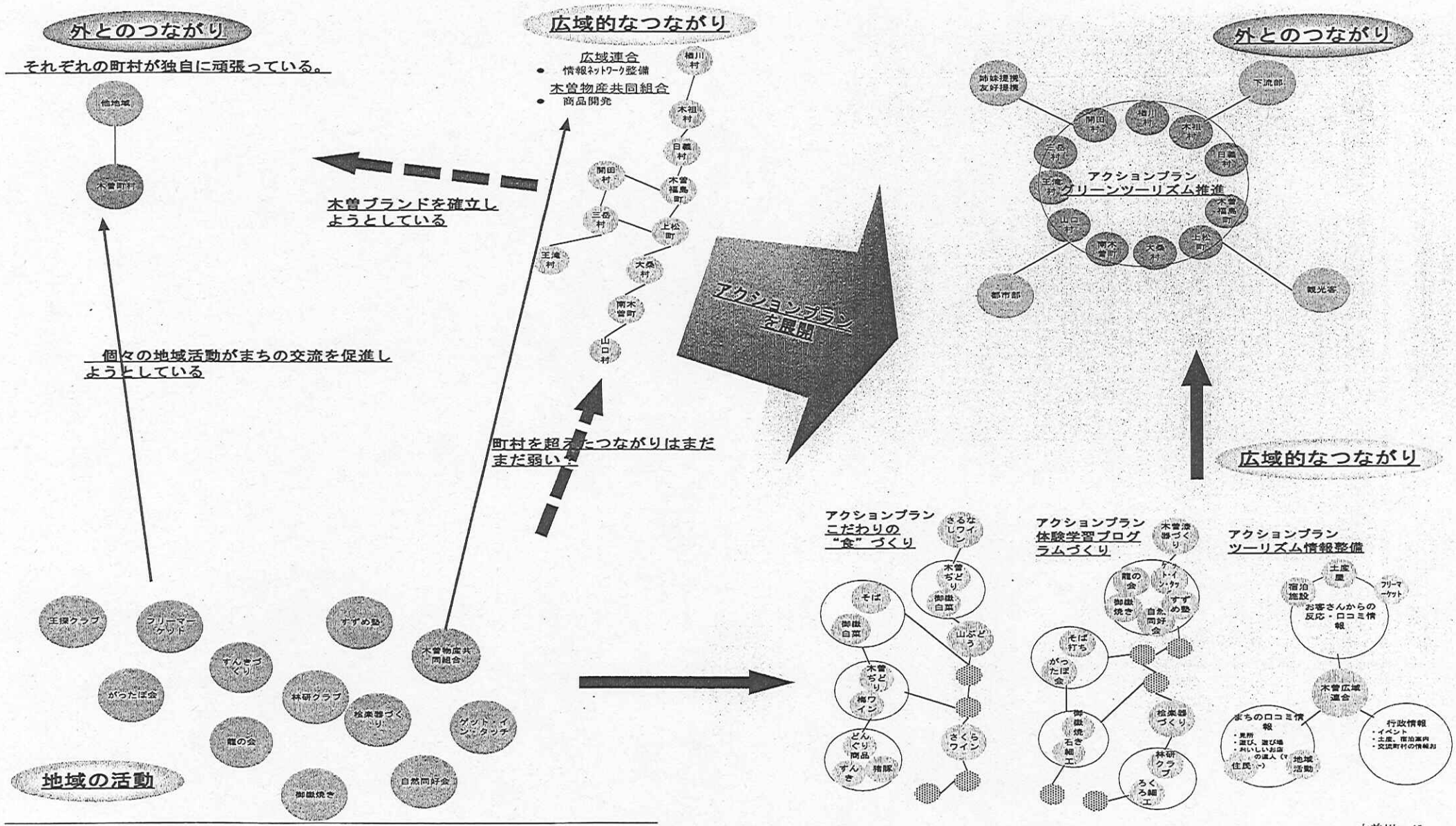
テーマ１…美しい木曽をつくる

今までの取り組みの成果を活かし　～　これからの方向を探ろう



テーマ２…地域資源を活かし、交流を拡げ深める

今までの取り組みの成果を活かし　～　これからの方向を探ろう



５－５．第７回懇談会

議論のポイント５…木曽郡で上下流交流を進めていく体制を整理する

最後の会議となる第７回懇談会は、木祖村での懇談会で提案された「今後の上下流交流を支える仕組み」について議論を行った。

今後木曽郡で上下流交流を進めていく視点を整理し、“木曽郡全体で交流を支える仕組み”“地域の活動をつなぐ仕組み”“広域的な活動をつなぐ仕組み”について各主体の関わり方を整理した。

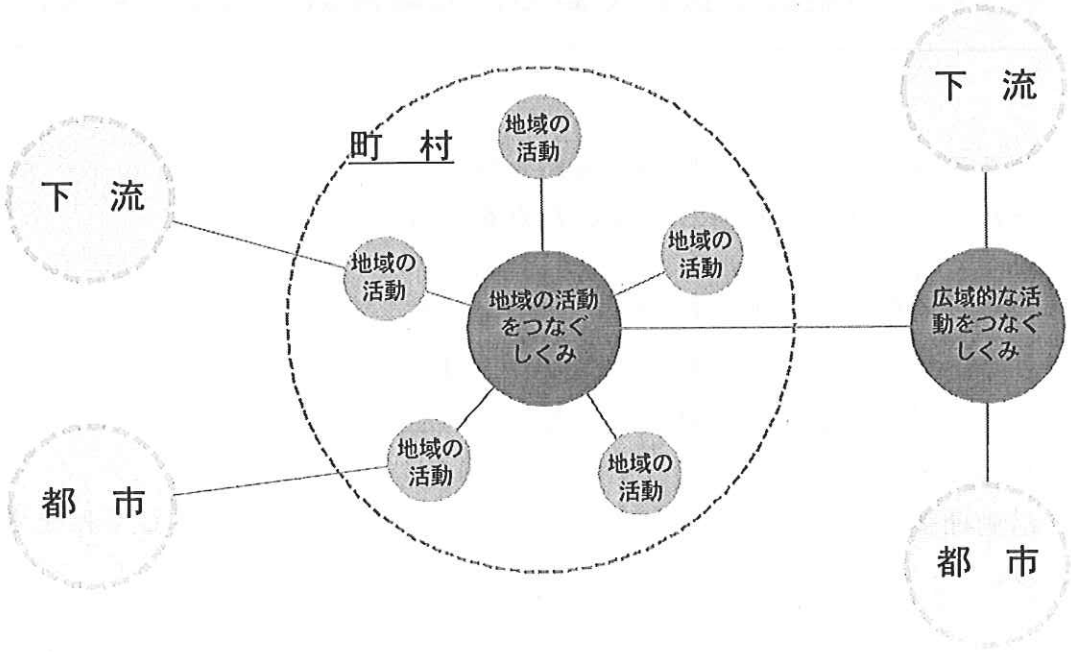
木曽独自の魅力を広域で高め、流域意識を広げていく。

○　今ある地域の活動や広域的な活動を活かしていこう。
○　それぞれの活動を理解し、優れた点を共有していこう。
○　地域の活動（小さな足下）、広域的な活動（大きな足下）、外との交流（外に目を向けた足下）をつなげていこう。
○　まず、できることから始め、次第に広げていこう。
○　いくつかの活動をつなげていくしくみを生み出そう。地域レベルで、広域のレベルで。
○　活動団体と行政、一般町村民との協力、連携を進めていくしくみを生み出そう。

上下流交流のつながりを強め、拡げていくためには、“地域レベルの連携”と“広域レベルの連携”が必要である。それぞれのつながりを強めることで木曽郡全体で上下流交流を支えるしくみを築いていく必要がある。

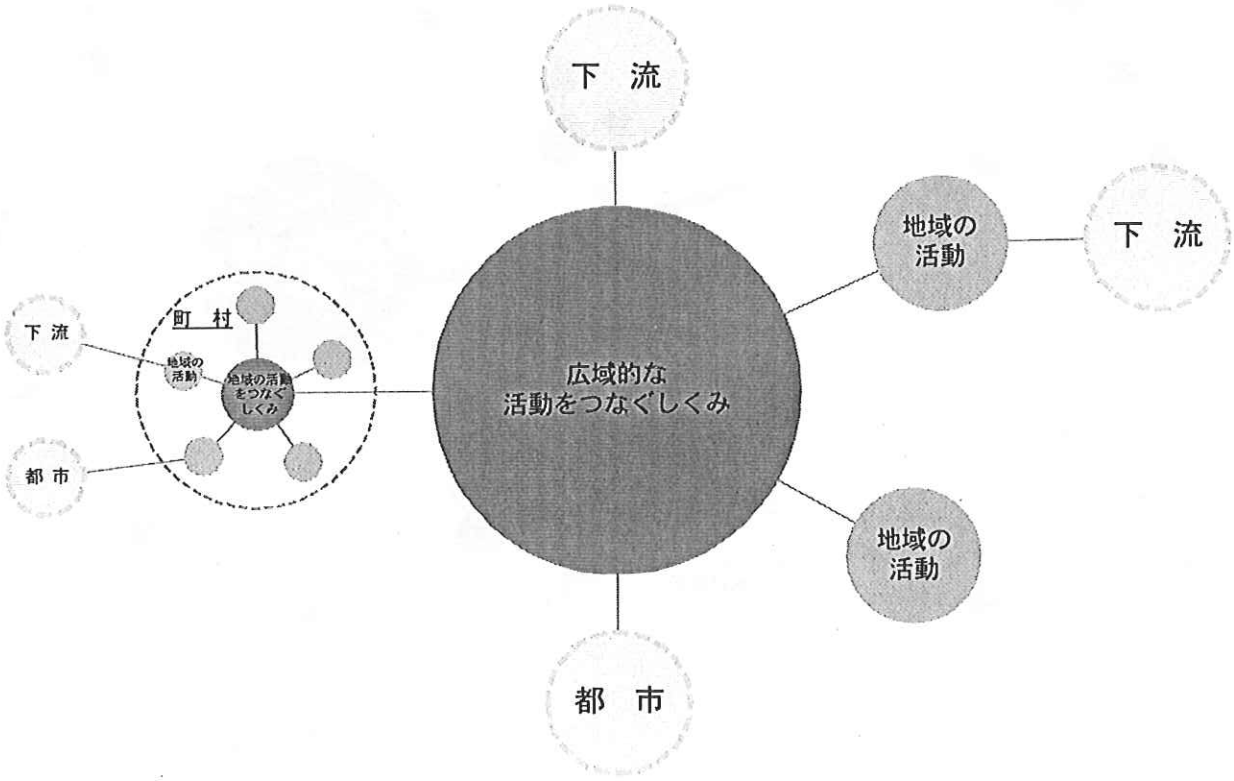
地域レベルの連携のしくみ

地域の活動と行政、一般市民が協力・連携し、“地域の活動をつなぐしくみ”を生み出し、地域レベルで外との交流を支えていく。



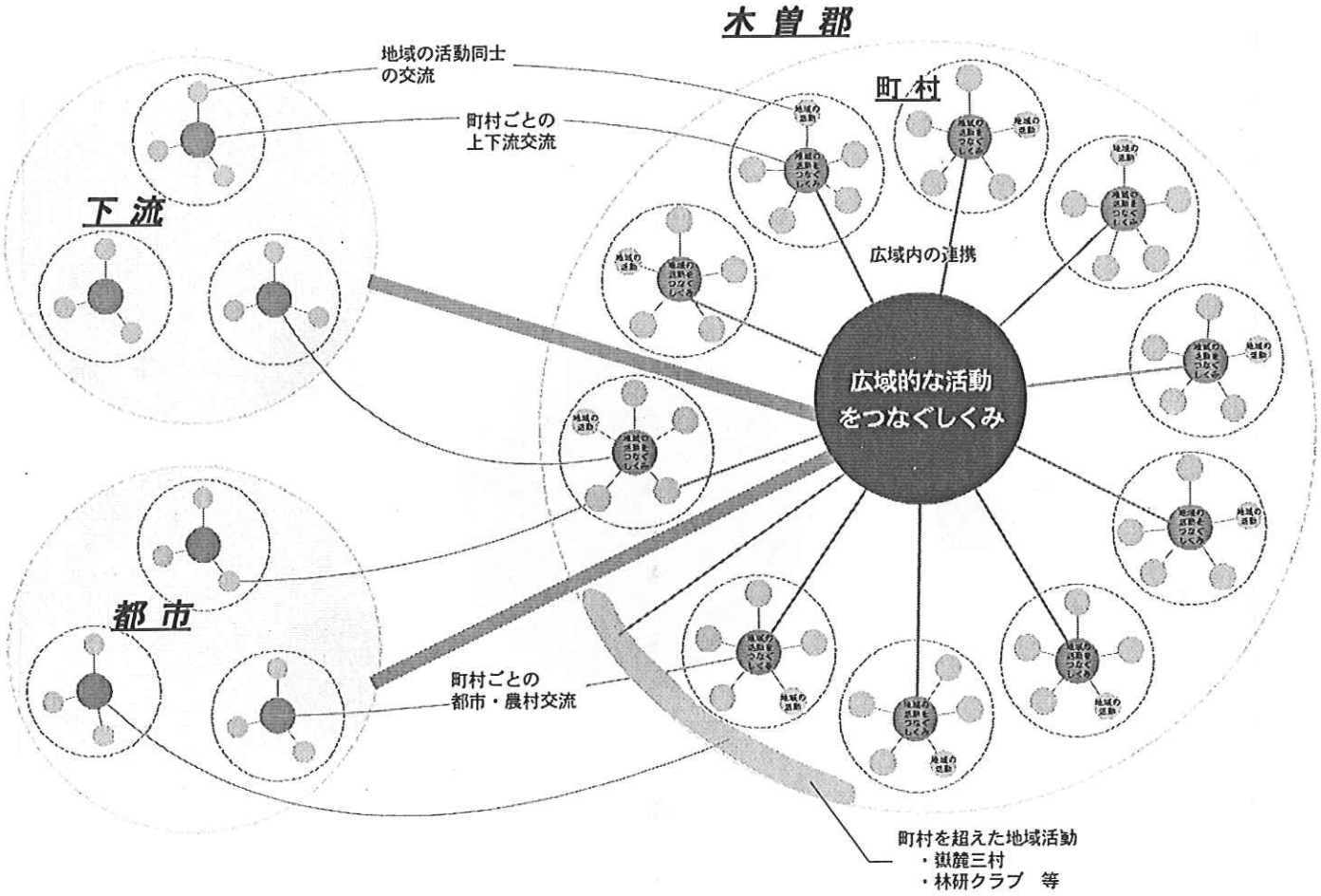
広域的レベルの連携のしくみ

様々な町村の地域の活動や町村の枠を越えて活動している団体、広域連合、一般町村民が協力連携し、“広域的な活動をつなぐしくみ”を生み出し、広域レベルで外との交流を支えていく。



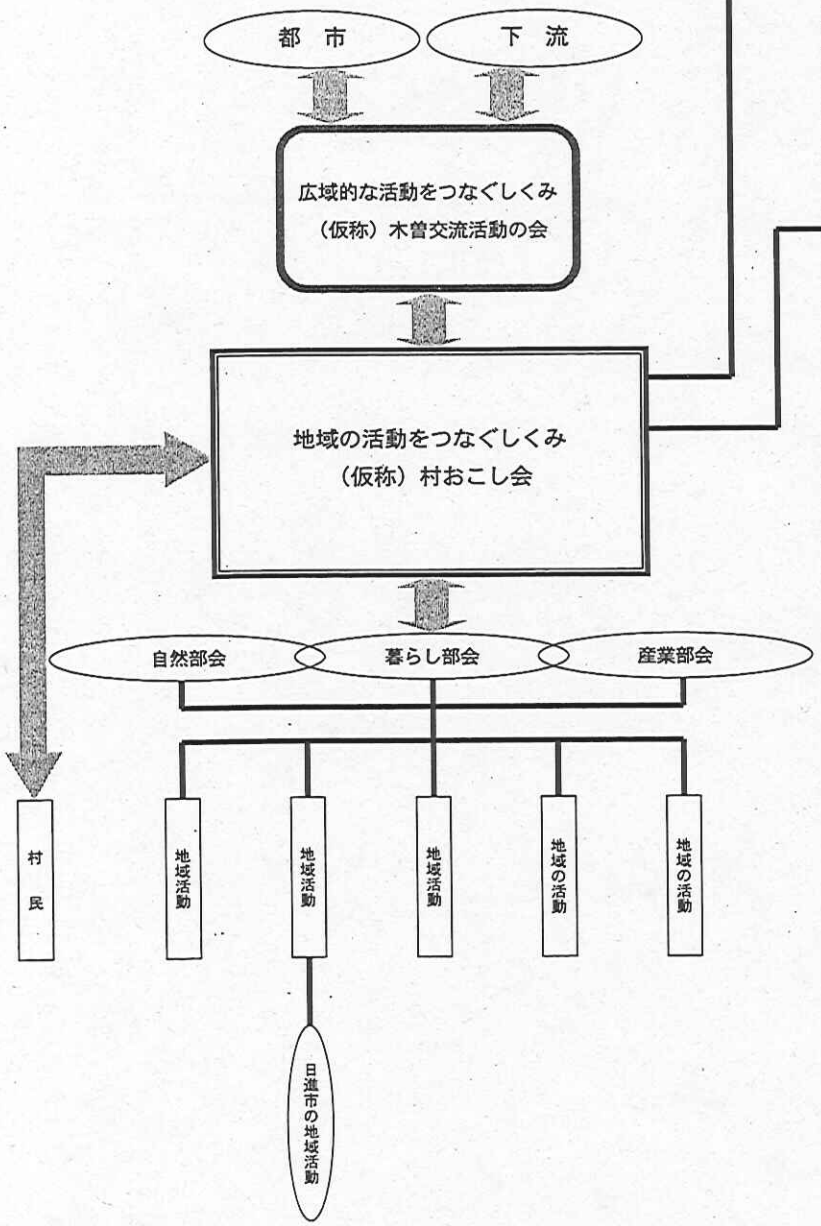
木曽郡全体で交流を支えるしくみ

木曽郡 11 町村でシステムを支え、木曽広域の人材、資源を活用し個々の交流を促進する。



「地域の活動をつなぐしくみ」の具体例（木祖村）

連携の構図



運営の内容

活動の柱…木曽は一つ

- ◆ 木祖村情報の収集・整理…人材、地域活動、資源
- ◆ 木祖村情報を村内に発信…かわら版発行
- ◆ 一般村民の意見集約
- ◆ 村内交流プランの企画
- ◆ 交流活動の支援…会場・機材提供、人材コーディネート

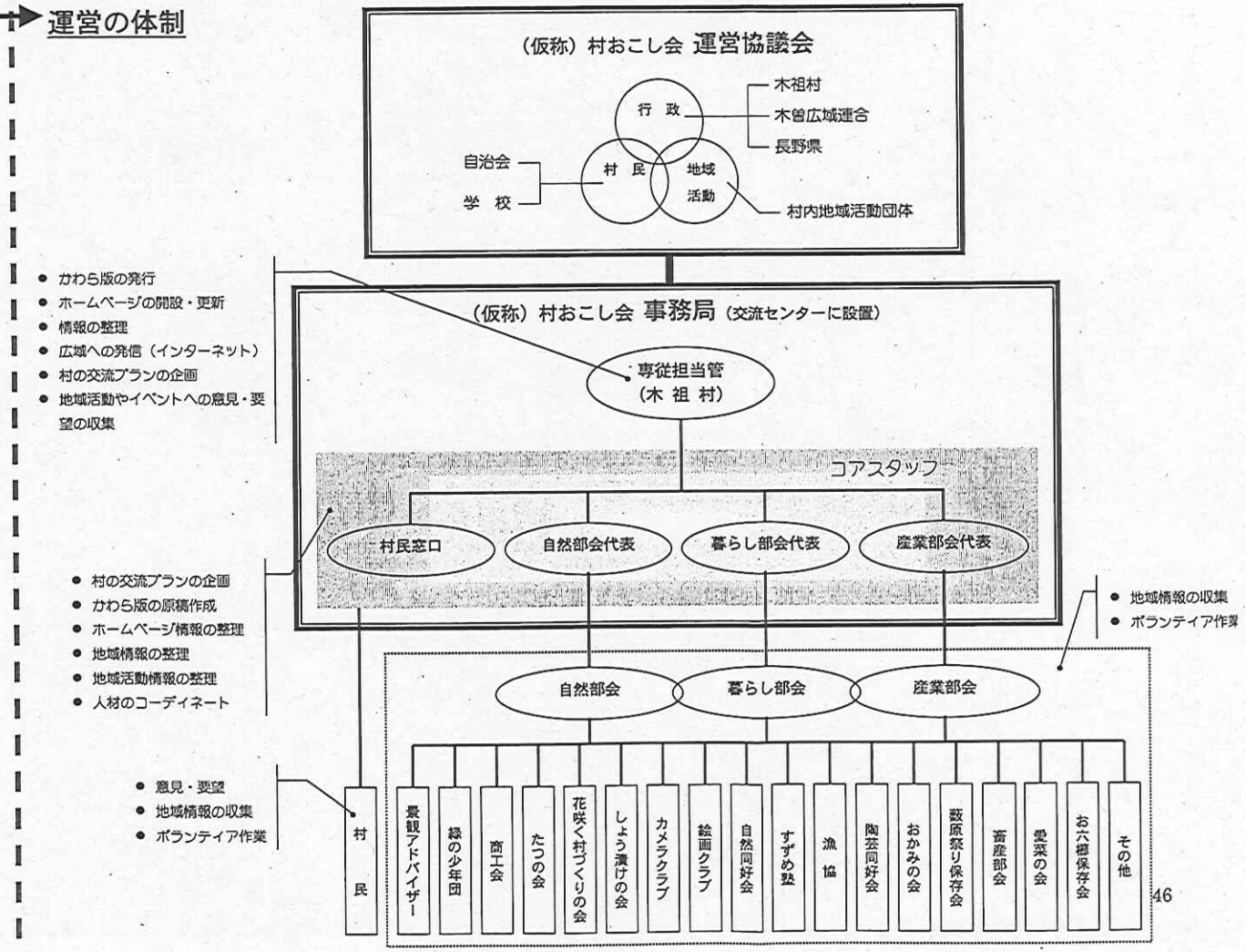
活動の柱…広域とつながる

- ◆ 木祖村情報を広域に発信…ホームページ・メーリングリスト（木祖村交流プラン、人材、地域活動、資源の情報発信）
- ◆ 他町村の人材・地域活動の把握
- ◆ 他町村の人材・地域活動と連携した郡内交流プランの企画
- ◆ 交流活動の支援…会場・機材提供、人材コーディネート

活動の柱…下流とつながる

- ◆ 木祖村情報を下流に発信…ホームページ・メーリングリスト（木祖村交流プラン、人材、地域活動、資源の情報発信）
- ◆ 都市・下流の人材・地域活動・交流ニーズの把握
- ◆ 都市・下流の人材・地域活動と連携した交流プランの企画
- ◆ 交流活動の支援…会場・機材提供、人材コーディネート

運営の体制

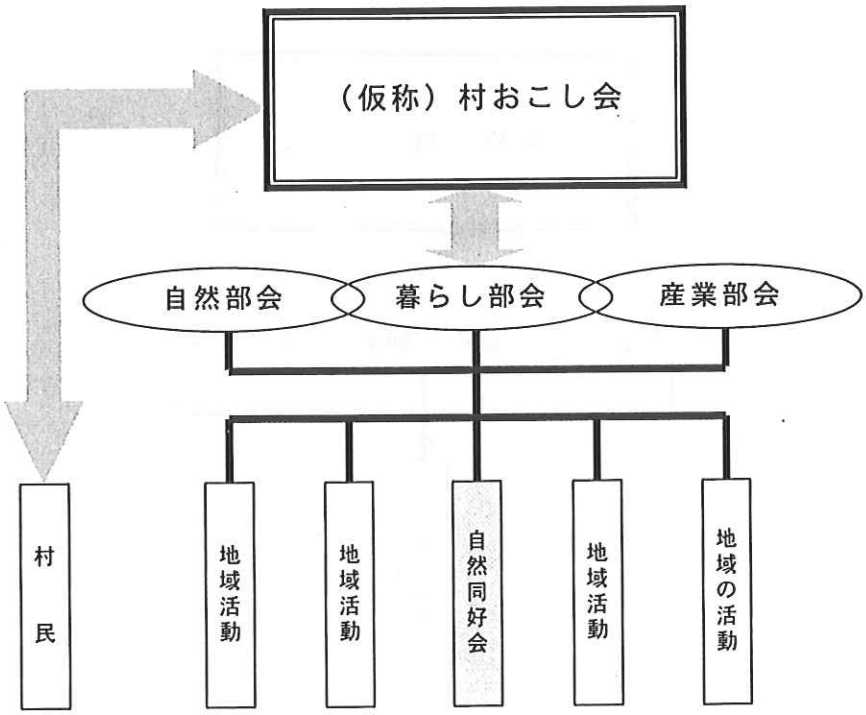


「地域の活動をつなぐしくみ」の具体例（自然同好会）

活動の柱…木祖村は一つ

〈（仮称）村おこし会が機能することによって〉

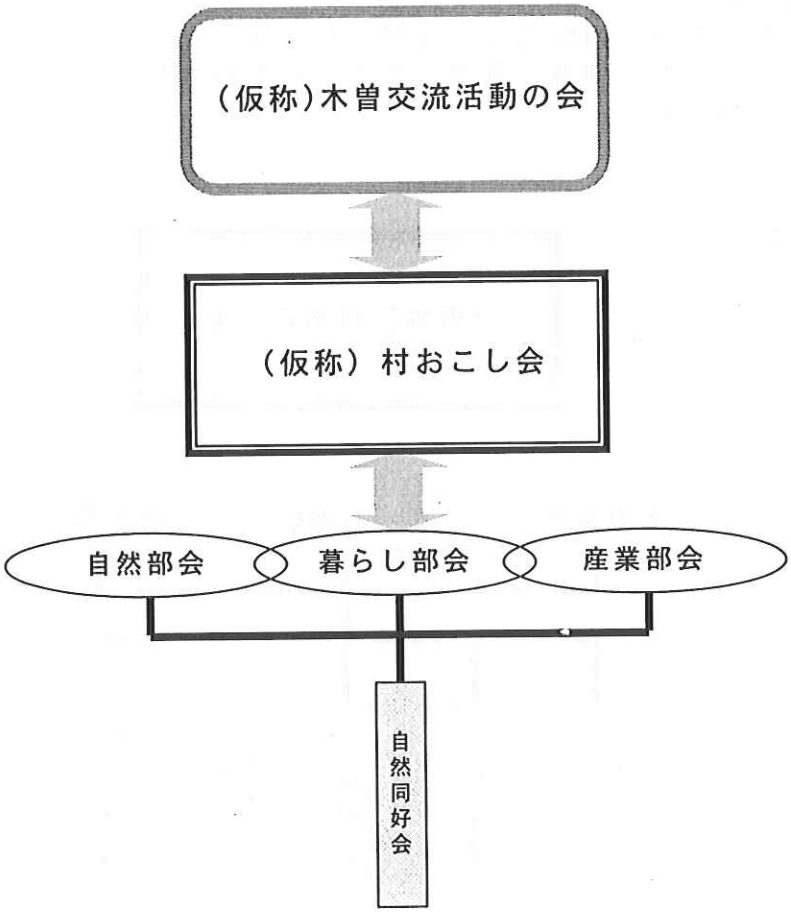
- ◆ 村内の自然関連の人材リストが利用できる。
- ◆ 村内の優れた自然スポット一覧が利用できる。
- ◆ かわら版を通じて、自然環境情報を村民に発信できる。
- ◆ かわら版を通じて、自然同好会のイベント紹介やその動員をかけられる。
- ◆ アンケート等を通じて、自然同好会の活動に対する一般村民の意見・要望を聞くことができる。
- ◆ アンケート等を通じて、一般村民の自然関連情報（口コミ情報）を収集できる。
- ◆ 他の地域活動と協力し、自然関連イベントや交流プランの企画ができる。
- ◆ 交流センターを自然同好会の会議室として利用できる。
- ◆ 村内の人材や、他の地域活動でつきあいのある人材を自然同好会の講師として紹介してもらえる。



活動の柱…広域とつながる

〈(仮称) 村おこし会と (仮称) 木曽交流活動の会がつながることによって〉

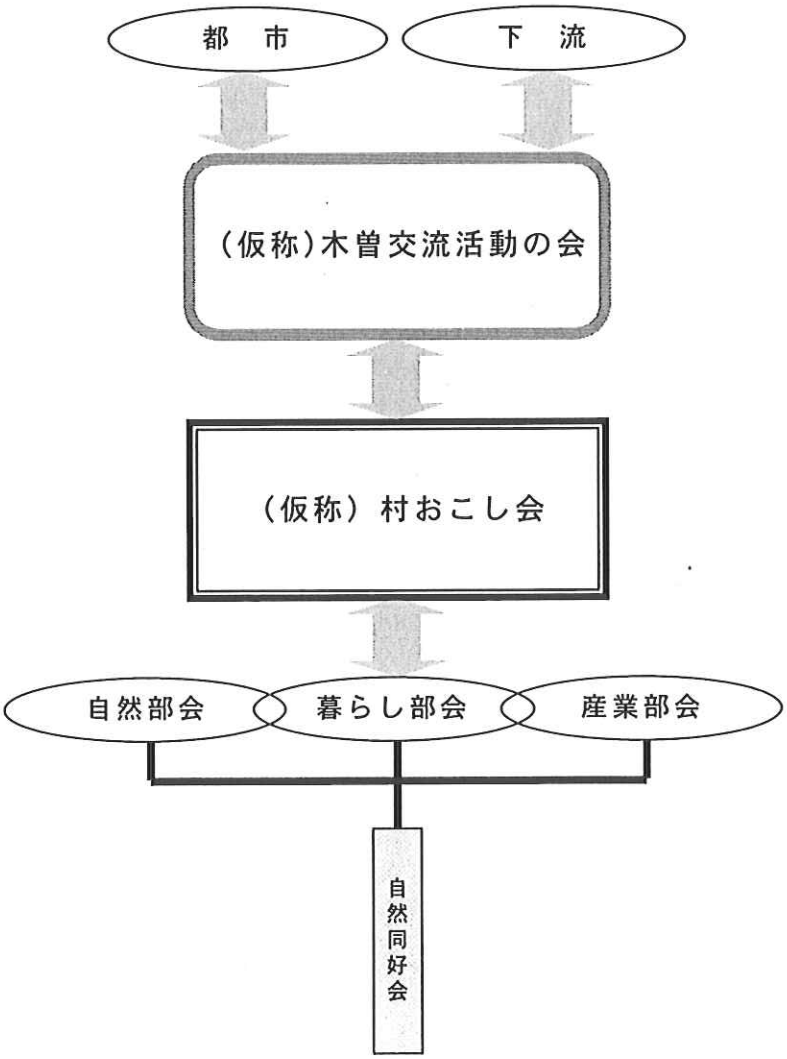
- ◆ 郡内の自然関連の人材リストが利用できる。
- ◆ 郡内の優れた自然スポット一覧が利用できる。
- ◆ ホームページ・メーリングリストを通じて、郡内に、自然同好会のイベント紹介やその動員をかけられる。
- ◆ 他町村の地域活動と協力し、自然関連イベントや交流プランの企画ができる。
- ◆ 郡内の人材や、他の地域活動でつきあいのある人材を自然同好会の講師として紹介してもらえる。



活動の柱…下流とつながる

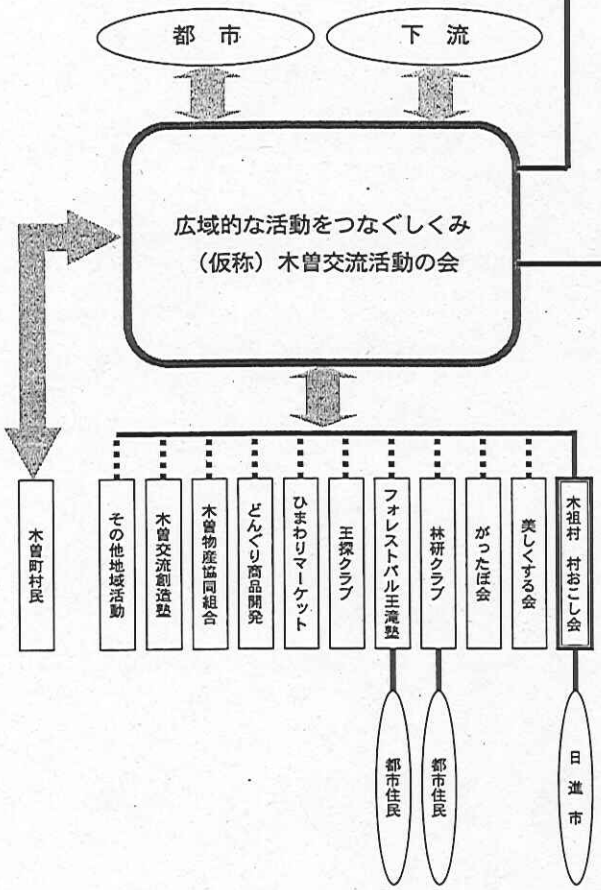
〈（仮称）木曽交流活動の会を通じて〉

- ◆ 都市・下流の自然関連の人材リストや地域活動リストが利用できる。
- ◆ 都市・下流の自然関連の交流ニーズを把握しやすくなる。
- ◆ ホームページ・メーリングリストを通じて、都市・下流に、自然同好会のイベント紹介やその動員をかけられる。
- ◆ 都市・下流の地域活動と協力し、自然関連イベントや交流プランの企画ができる。



広域的な活動をつなぐしくみの具体例

連携の構図



運営の内容

活動の柱…木曽は一つ

- ◆木曽郡の収集・整理…人材、地域活動、資源
- ◆木曽郡情報を町村に発信…ホームページ、メーリングリスト
- ◆町村民の意見集約
- ◆木曽郡の交流プラン素案の企画
- ◆交流活動の支援…会場・機材提供、人材コーディネート

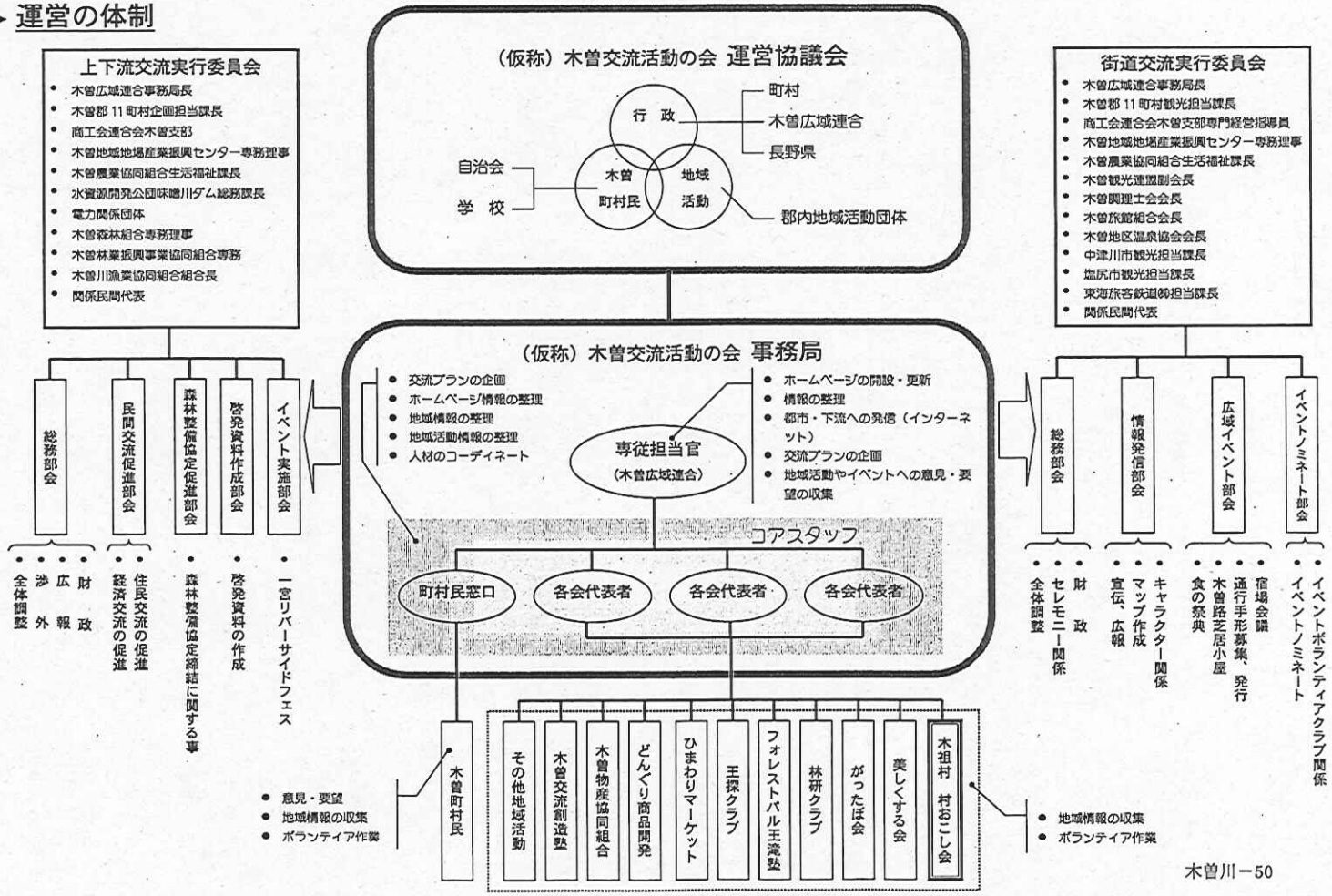
活動の柱…広域から地域を結ぶ

- ◆木曽郡の交流プラン素案をもとにした各町村の交流プランの企画
- ◆交流活動の支援…会場・機材提供、人材コーディネート

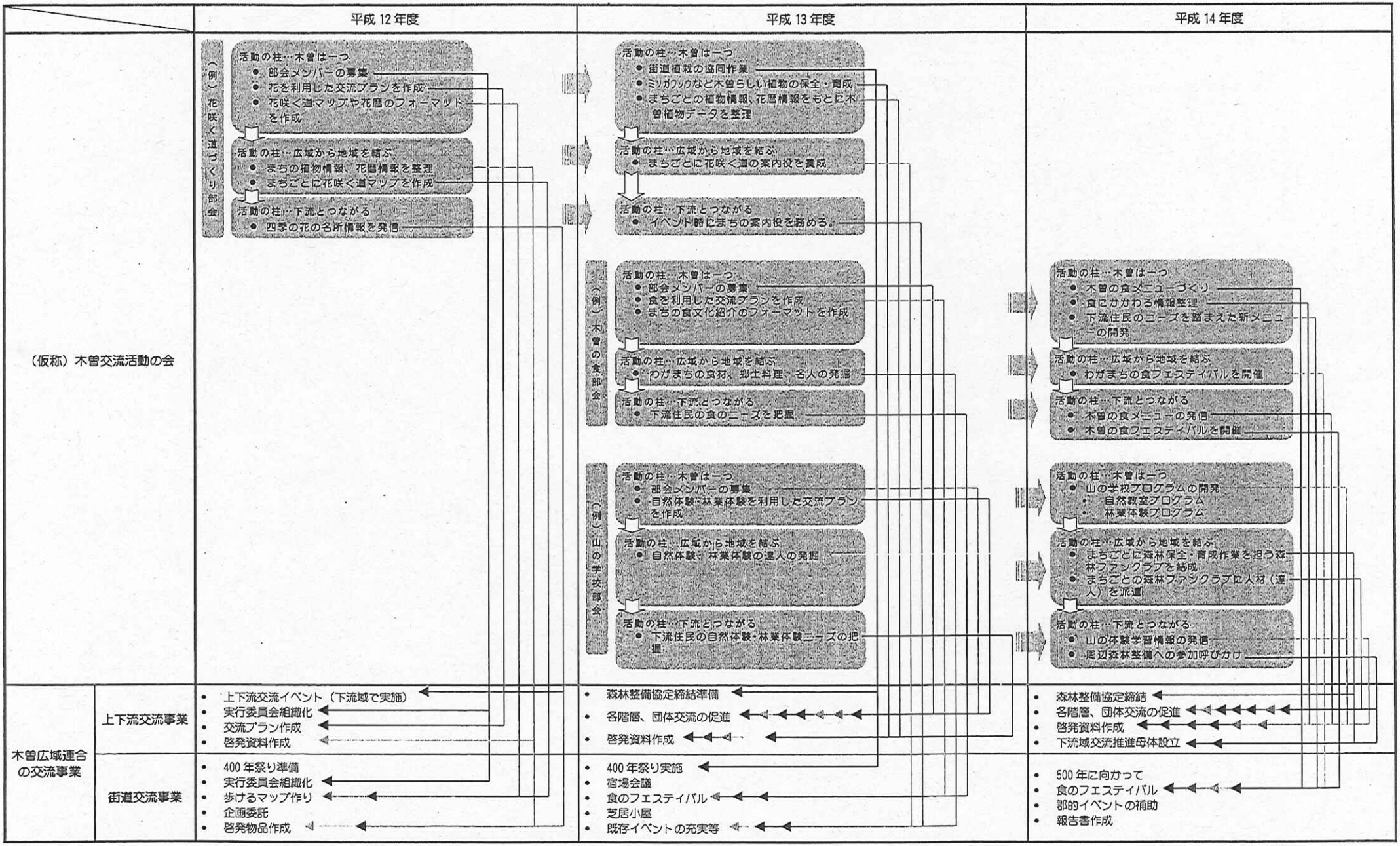
活動の柱…下流とつながる

- ◆木曽郡情報を下流に発信…木曽郡交流プラン、人材、地域活動、資源の情報発信
- ◆都市・下流の人材・地域活動・交流ニーズの把握
- ◆都市・下流の人材・地域活動と連携した交流プランの企画
- ◆交流活動の支援…会場・機材提供、人材コーディネート

運営の体制



「広域的な活動をつなぐしくみ」の行動例



6．今後の課題

平成 11 年度調査では、上流の地域住民、地域活動、行政が上下流交流を支えるしくみとして、“地域と広域をつなぐしくみ”“広域と下流をつなぐしくみ”のあり方を提案した。

この提案を受け、木祖村では地域活動団体や村民が行政と連携し、村の交流活動を促進したり、広域との連携を強めるための組織“（仮称）村おこし会”を立ち上げたいとの意向の持っており、平成 12 年度を準備期間として、本調査の懇談会メンバーを中心に会の立ち上げが検討されている。

一方、木曽郡では、平成 12 年 3 月 28 日に上下流交流実行委員会（木曽広域連合が事務局）が立ち上がり、木曽広域各町村の森林整備協定締結に向け、平成 15 年度まで様々な交流事業を展開する予定で、木曽広域連合では、こうした交流事業の企画・実施を行政だけでなく地域活動や地域住民の参加のもとに進めていく意向である。

そこで今後の取り組みとしては、木曽広域連合の具体的な事業に合わせ、平成 11 年度調査で提案した地域住民、地域活動団体、行政により上下流交流を進める体制を試行関係者の主体性を育み、(仮称)木曽交流活動の会の立ち上げに向けた気運を醸成し、交流連携のノウハウを蓄積していくことが肝要である。

また関係主体には下流の地域住民も巻き込むことで、上流、下流それぞれの交流母体の育成を図ることが必要である。

6－1．今後の課題

- 本年度調査で提案された上下流交流を支える連携の仕組み（地域住民、地域活動団体、行政により上下流交流を進める体制）の試行が必要である。具体行動に取り組むことで仕組みの具体化が図られる。

- 試行にあたっては、既存の交流事業への提案など、議論の結果が具体的な成果に結びつくプロセスを試行することが重要。関係者の主体性を育み、（仮称）木曽交流活動の会の立ち上げに向けた気運を醸成し、ノウハウを蓄積する。

- また、上流だけでなく下流側も議論に巻き込むことで、運命共同体として、上流・下流が共同で上下流交流を支える必要性を投げかける。

6－2．具体的取り組み（案）

＜目　標＞

- 地域－広域－上下流をつなぐ仕組みづくりとして、足下から流域に至るプロセスを下流住民と共に検証・構築していく。

＜体　制＞

- 現在、上下流交流に取り組んでいる町村の交流団体や行政の交流担当者を中心に、広域連合、上下流交流実行委員会部会メンバー、長野県をメンバーとした検討会を設置する。現在、木曽の上下流交流の実態としては以下のケースが考えられ、それぞれのケースから、当事者が議論へ参加することが望まれる。
  - 既に地域活動同士の交流を進めている。（木祖村～日進市）
  - 行政主体で上下流交流を進めている。（例：王滝村～東郷町、半田町）、（三岳村～三好町）、（大桑村～師勝町）
  - これから上下流交流に取り組もうとしている。（例：開田村～南知多町）
  - その他

- 本検討会が今後の上流・下流それぞれの交流窓口の準備会となることを念頭に検討を進める。

＜主な検討テーマ＞

- 上下流交流が愛知用水の水源林保全から始められていることから、まずは今ある“水源林のつながり”を上下流としていかに守り育んでいくかを検討テーマとする。上流・下流の役割分担や水源林保全・育成活動に関する他町村との連携のあり方、上下流住民の水に対する学習のあり方について議論する。

- 次に、今ある水源林のつながりを活かしより多様な交流を育むことを検討テーマとする。上流・下流それぞれの交流ニーズやお互いの置かれている状況の違いから課題を抽出し、何をすべきか議論する。

- 新たな水のつながりを育成を検討テーマとする。上下流交流を広げ、深めるために、まだ上下流交流に取り組んでいない町村にどのように働きかけるか、現在、上下流交流に取り組んでいる町村同士の連携を、いかに深めるかを議論する。

＜成果の活かし方＞

- 今後の上下流交流に向けて、水のつながりを活かした交流方針を立て、木曽上下流交流実行委員会に提案する。成果を木曽郡の上下流交流事業に反映させ、議論の継続・具体化を図る。